

No. 471【2021年9月3日配信】

「東奥音頭」の作詞者は誰？（担当：村上）

こんにちは。歴史資料室の村上です。今回は東奥日報社が『東奥日報』第15,000号の発行を記念して昭和9年（1934）に制作した「東奥音頭」という歌をご紹介します。

東奥日報社は昭和9年5月24日に発行された『東奥日報』第15,000号において、記念事業の一つとして「東奥音頭」の制作を発表し、歌詞を公募しました。6月3日付の紙面に掲載された応募規定には、歌詞は一節を「五・七・五・七・七調」とすること、一人五節まで応募できることなどが記されており、入選作のうち「優秀なもの若干」をレコードに吹き込むとしています。応募締切は6月末日でした。

審査結果は『東奥日報』7月15日付14日夕刊で発表されました。集まった「三百余篇」の作品から入選作として15作品が選ばれ、一等は鶴田村の宮本友蔵、二等は青森市の小木瑠窓と宮崎國太郎の作品に決まりました。完成した「東奥音頭」の歌詞は4番までありますが、このうち1番に採用されたのが宮本、4番に採用されたのが小木の作品でした。

作曲は淡谷のり子の「別れのブルース」を作曲したことで知られる服部良一が担当しました。服部は津軽・南部の民謡を参考に「四日間殆ど徹夜で苦心して」作曲したそうです（『東奥日報』昭和9年8月17日付16日夕刊）。

さて、この歌について藤川ツトム『改訂版 青森市にまつわる歌』（発行年不明 Fuji音楽工房）では作詞者を「こぬま・かんし（小沼幹止）」と紹介しています。小沼幹止『うたのほんこ』（1972年 放送ジャーナル）を参照すると、作詞した歌として「東奥音頭」や「青森県民機を讃える歌」が挙げられています。しかし、「東奥音頭」のどの部分を作詞したのかについては記されていませんでした。

そこで、手がかりを求めて小沼が作詞したという「青森県民機を讃える歌」についても調べてみたところ、昭和16年に東奥日報社が歌詞を募集した際、小沼が笹波美樹というペンネームで応募していたことがわかりました。さらに、入選者発表の記事（『東奥日報』昭和16年3月16日付15日夕刊）に記された笹波の住所を確認すると、なんと「東奥音頭」の歌詞募集で二等に選ばれた小木瑠窓の住所と同じでした。

また、小沼は笹波美樹以外にも北野明というペンネームを使って作品を発表していました。ねぶた祭の際に流れる「ねぶた音頭」の歌詞もその一つです。小沼は場面に応じて複数のペンネームを使い分けていたのかもしれませんが。

このように、小沼が著作に「東奥音頭」の作詞をしたと記していること、「東奥音頭」の4番の作詞者である小木瑠窓の住所が小沼の住所と同じであること、そして小沼が複数のペンネームを使って作品を発表していることから、小沼幹止が「東奥音頭」の4番の作詞者である可能性は高いと考えられます。

※今回の内容は『東奥日報と昭和時代（前期）』（1979年 東奥日報社）などを参考にしました。



『東奥日報』第15,000号の発行を記念して行われた「国道走破長距離競走」のようす（『東奥年鑑』昭和10年版、国会図書館デジタルコレクション）